

議事録（議事要旨）〔第 4 回会議〕

1. 日 時 平成 30 年 11 月 19 日（月） 10:00～11:45
2. 場 所 福井県庁 7 階 特別会議室
3. 議 題 （1）第 3 回会議（学校視察）の振り返りについて
（2）計画の見直しに向けた今後の課題について
4. 出席者 進士五十八座長、秋田喜代美委員、荒瀬克己委員、
石井パークマン麻子委員、五十川早苗委員、宇佐美嘉一委員、
角野俊彦委員、佐々木知也委員、釣本真史委員、
中嶋茂男委員、林正岳委員
東村健治教育長、西野里佳教育委員、原公樹教育委員

5. 議事要旨

<議題 1>

- 事務局から、「学校視察の概要」について説明した。
- 委員から、学校視察では、校長先生の「教員は大変多忙」との言葉が印象に残った。個人情報の取扱いについては、全国一律に適用するのではなく、各学校の保護者が決められないのか。また、東京都世田谷区の学校には「おやじの会（父親中心のボランティア組織）」があり、本音で議論できる場がたくさん出てくると、保護者の要求も減るとの発言があった。
- 委員から、個人情報の配慮が学校の負担になっている具体例があるのかとの質問に対して、事務局から、連絡網がなくなり、保護者対応が増えていると回答した。
- 委員から、部活動に外部指導者を導入する意義は理解するが、やりがいを感じている教員もあり、現場は矛盾を抱えているとの発言があり、事務局から、視察先の中学校で、少人数で活動できない部活動は閉じていくという説明があったと回答した。

- 委員から、保護者の要求するレベルは上がっており、学校がどこまで対応するかを、マニュアル等で具体的に示す必要があるとの発言があった。
- 委員から、藤島高校の英語や化学の授業は、わからない生徒を置いてきぼりにしているのではないかと不安を感じた。他校ではどう授業を進めているのか。これからの英語教育を考える上で、どう授業を進めていくのか知りたいとの発言があった。
- 委員から、アクティブラーニングが進んでいない高校は、教員自身がやり方を理解していない。教員には広い知識や見識が求められると思うので、まずは教員の資質向上が大事であるとの発言があった。

<議題 2>

- 座長から、1個1個の論点に深入りすると必ず教員の負担は増える。社会の要請を教育現場が素直に受け取るというのではなく、全体の仕組みをどうするかを議論しないと本質的な解決にならないとの発言があった。

(幼児教育)

- 委員から、福井県が「突破力」と呼ぶ「自己調整能力」「言語力」の育成は、小中高校では遅すぎる。幼児期から児童期の最初に読書体験を積み上げないと、その後いくらやっても質の高い読書はできない。小中学校の巡回図書を幼稚園・保育園でも実施してはどうかとの意見があった。
- 委員から、保育者はシフト制で働くようになった。個人を抜き出して研修する時代ではなく、いかに情報を共有して、園全体としてどう専門性を向上するかが重要との発言があった。
- 委員から、小学校教員が保育者を理解して終わりではなく、保育者も小学校の生活科やスタートカリキュラムを理解するという相互理解が進まない、保育者の満足度は上がるが、本当の連携には繋がらないとの発言があった。
- 委員から、幼稚園教育要領と学習指導要領はリンクが進み、幼児教育がより重要になっている。個人情報などをどこまで保護するかという話も、中学校、高校で急に保護者のネットワークを作ろうとしてもできない。幼児教育の段階からそうした保護者理解を進めれば、全国的な事例になるとの発言があった。

- 委員から、発信型の講座も大事だが、いろいろな専門性を持つ保護者を活用して、園を豊かにするという発想があるとよいとの発言があった。
- 委員から、小中学校にどんどんスクールカウンセラーが配置されている。幼児期から家庭、子どもの特徴を見定めることも大事なので、キンダーカウンセラーを活用してはどうかとの意見があった。

(小中学校教育)

- 委員から、読書量を増やすには、学校図書館を利用した授業をどのように全教科で展開するのか研修が必要である。週1回の朝読書でも不読率は下がるが、どんどん他に置き換わり、基礎力が弱くなっていると思う。「読書推進計画」を作成していない市町は意識も薄いので、県は、市町と一緒に取組んでほしいとの発言があった。
- 委員から、活字を読まない学生が増えている。福井大学でも、それが教員の質に関わってくる。地元で過ごした学生が入学してくるので、大学も含めた接続の視点は大事であるとの発言があった。
- 委員から、教員には社会性のない人が多い。読書も大事だが、人との交流を通して人間力が高まるので、自ら能動的に行動するためのツールとして、教員には名刺を持っていただきたいとの意見があった。一方で、教員の力は、子どもたちとどう接するかで発揮されるべきで、他との関わりが深い方がよいかどうかは別問題であるとの発言があった。
- 委員から、読書や課題解決型学習は、結果を出そうとすると失敗する。結果が重要視されると、ただ形を作って終わりになってしまう。(スマートフォンの普及により)社会全体が本を読まない、ものを考えなくてよい方向に動いているので、そうした中で、学び方がしっかり身に付いたかどうかを丁寧に見ていくことが大事であるとの発言があった。

(業務改善)

- 委員から、県全体で対応すべき取組と、地域の特性を生かした取組を精選しながら、ビルド&スクラップすること。このままあれもこれも取組むと、教員も子どもも疲弊して、結局、取組自体が滞ってしまうとの発言があった。

- 委員から、教職に魅力がないのは、労働環境が全く改善されないからとの発言があった。
- 委員から、校務支援システムを徹底する、非常勤職員を手厚くして、本来の業務以外の時間を減らすことが大事であるとの発言があった。
- 委員から、子どもの変化、成長を保護者と写真や学年通信などで共有できると教員も元気が出る。福井県はそこを大事にしているので、都道府県の中では教員になりたいと思う人は多いと思う。そういうところをイメージアップ戦略としてうまく生かしていけるといいとの発言があった。
- 委員から、超過勤務の時間管理や事務作業の効率化も必要だが、スキルを上げることで質的に負担感を減らすことも必要である。仕事のストレスは量的負担と仕事のコントロールの掛け算であり、仕事のコントロールとは裁量、自分の能力が生かされているという実感であるとの発言があった。
- 委員から、5S（整理・整頓・清掃・清潔・躰）を徹底している会社は必ず儲かる。民間の手法を学校に取り入れることも大事なので、教員には、地元企業を見て、知ってもらいたいとの意見があった。
- 座長から、組織マネジメントで学校をどう改善するかを考え、実際に第一歩を踏み出さないといけない。民間の経営手法を勉強したり、現場の意見を聞いたりする機会を作っていただきたいとの意見があった。